

夢だった書店員なれた

大賀真悠子 大学生

(三重県桑名市) 18歳

書店で働くことが、幼いころからの私の夢だった。物心ついたときから本が好きで、外で遊ぶよりも部屋で読書しているタイプだった。そんな私にとって、書店はまるで夢の国。ほしい本のあてがなくても、ただ見るだけで至福のひとつきを過ごすことができた。そして夢の国である書店で働く人に憧れていた。

高校卒業後の春休みにチャンスが訪れた。近所の書店の扉に、求人ポスターが貼られていたのだ。すぐさま応募して、即採用となった。ようやく幼いころからの夢をかなえることができた瞬間は、感謝や感動で胸が熱くなった。

実際に働いてみると、ただ本にふれ合える夢の場所だけではなく、雑務や会計作業など覚えることが山のようにあった。理想と現実のギャップは激しかったが、幼いころの憧れに近づけるように努力している。いつか私も、誰かに夢を与えられるようになるために。

2025年4月2日(水)『中日新聞』「発言一次世代の声」より
※この記事は中日新聞社の承諾を得て掲載しています。